改訂版　江戸時代以前の越谷を通る古奥州道（一考察）

NPO 法人越谷市郷土研究会　加藤幸一

今の日光街道（日光道中）は江戸幕府によって江戸初期にできた直線道路である。その時に草加宿や越ケ谷宿、粕壁宿が成立している。しかし、その前から奥州へ通じる古くからの道があったはずである。

その越谷や春日部を通る道筋が、江戸時代中頃の文化文政年間に越ケ谷宿の本陣を勤めた福井猷貞によって書かれた「越ケ谷瓜の蔓」の中に記述されている。そのルートを前提に、古道はおそらく主要な川の自然堤防上を通ったであろうということと、越谷・春日部周辺の江戸時代の古地図（越谷市立図書館所蔵）の解読をもとに具体的に考察することにした。

なお、今から約２００年前に記された書物「越ケ谷瓜の蔓」は、江戸幕府ができて約２００年もたってからの文献ではあるが、江戸時代以前の奥州道をつかむ上で貴重な手掛かりとなる。

また、考察するにあたって、髙﨑力氏や秦野秀明氏の研究成果を取り入れたことをここに記す。

１．隅田宿から出る奥州道

古代に隅田宿（隅田千軒宿）のあった現在の墨田区内の墨田２丁目交差点には、二つの古道が十字路として交わっている。東西の古道は、武蔵国府（現在の府中市）と下総国府（現在の市川市国府台）とを結ぶ東海道であり、北に伸びる古道は、堀切、亀有、金町、松戸を通って奥州（東北地方）に通じる奥州道（奥大道、陸奥道）であったという。

この奥州道は北東に向かうが、堀切の手前で北西に分かれて関屋の里（現在の足立区千住関屋町）に通じる道があり、これも奥州道の一つと考えられている。関屋から北西に進み、元宿（現在の足立区千住元町）、中世の渕江城（足立区本木の中曽根神社付近）跡の西側を通り、ここから現在の伊興遺跡方面に向かって北上するルートである〈註１〉。

さらに元宿の２キロ手前で分かれて北北東に直進して江戸時代の日光街道を通り、続けて下妻街道筋を通る奥州道もあったと思われる。このルートが越谷・春日部地域を通っている奥州道と考えられる。

以下、この古奥州道について述べる。

２．「越ケ谷瓜の蔓」に書かれた奥州道

江戸時代以前の奥州道については、江戸時代の文化文政年間に書かれた「越ケ谷瓜の蔓」（福井猷貞著）に次のように述べられている。

一部原文を手直しした。秦野秀明氏の指摘により、原文の「～通り」は「～[を]通り」と置き換えた。

往古奥州道、①千代田御城下より、②千住秋屋の里、③大原通、④八条堤通、⑤南百角より西方、⑥中町横町より元荒川[を]渡り、⑦押立堤[を]通り、⑧大里古往還、⑨間久里、⑩粕壁橋手前より⑪百間[を]通り、幸手[に]入。⑫御成道迄川付き堤[を]通り、往還にて之れ有る由。

① 徳川家康は、天正１８年（１５９０）８月１日の「八朔」の吉日に関東に入り、江戸湊（東京湾）から奥に入り込む遠浅の日比谷入江（新橋から大手町にかけて）そばの江戸館（後の江戸城、千代田城）に移り住んだという。奥州へは、ここからまずは平川（日本橋川）を渡り（今の常磐橋あたり）、後の日光街道を進み、忍岡や浅草寺の東側を過ぎ、隅田の渡しを渡り、隅田川の対岸の木母寺あたりに至る。そして東進して古代の隅田宿（墨田２丁目交差点）に進み、ここから奥州に向けて北進する。

② 「千住秋屋の里」とは「関屋の里」の誤りであろう。千住関屋町あたりから隅田の渡し迄を指す。

③ 「大原通り」とは、八潮市内にある大原道を指す。大原を抜けることから、下妻街道を通って内匠橋（榎戸橋」〈註２〉）を渡ることがわかる。つまり、千住から下妻街道沿いに行き、現在の綾瀬川に架かる内匠橋を渡る。その先は左折して大原に向けて北上する大原道〈註３〉を通る。ここでは「大原通り」となっている。

なお、内匠橋から小菅方面に流れる現・綾瀬川は江戸初期の寛永年間に作られた人口の川である。

一方、内匠橋より、そのまま、まっすぐ東方に進むのが下妻道である。実は、この下妻道の方が奥州道であるとの説がある。その説によると、古新田の古利根川沿いに進み、八条の渡しに向かうことになる。古新田村の古利根川沿いに、今でも大相模地区に見られる土手道のような堤土手の道が残っている。これも奥州道の一つではあろう。

しかし、大原道も比較的高い土地（かつての大河と推定される毛長川の自然堤防か）にあり、「八条の渡し」〈註４〉に行くには大原道の方が大水で難渋することもあまりないだろうし、最短距離であるため、「越ケ谷瓜の蔓」に書かれていた通りに大原道を江戸時代以前の越谷方面に向かう奥州道とした。

④ 「八条堤通り」とは、中川右岸沿いの堤の土手道を指す。大原道の突きあたりの八条の渡しで川を渡らずに、川の右岸に沿って北上する。これが「八条堤通り」と呼ばれていたのであろう。八条堤とは八条領にある中川沿いの八条、柿ノ木町、東町にある自然堤防上の堤の土手道のことである。現在の土手道は、過去に何度も決壊したため大きく変わっていると思われる。地元では下妻道と呼ばれた。

この下妻道沿いには八条遺跡や八条輪中遺跡という古代から中世にかけての埋蔵文化財包蔵地がある。八条輪中遺跡の一つである明治に廃止された神社「八条殿社」は古墳の上に建てられていたという（「新編武蔵風土記稿」）。また埼玉県埋蔵文化財調査事業団が行った八条遺跡での発掘調査（八潮市八条八幡神社東側）では平安時代の住居跡や中世近世の遺物が見つかり、平成２４年６月４日に市民見学会を行っている。それゆえ、この下妻街道は江戸時代以前から存在していたことが裏付けられる。

⑤ 「南百角より西方」とは、南百で左方面に曲がって進む、南百（註５）から西方にかけての元荒川の土手道を指す。今でもほぼ昔のままに留めている土手道が一部残っている。中川（古利根川）沿いの八条堤通りより、引続き元荒川沿いの右岸の土手道を西に進んだのである。古代の元荒川は、下総国と武蔵国との国境を流れた利根川本流であり、その後は荒川の本流ともなった大河である。この大相模の地域でも発掘すれば八条地域と同様に古代から中世にかけての遺跡が発見できるに違いない。

その後は、瓦曽根溜井沿いの土手道、越谷市中央市民会館や市役所の西側の道（かつての土手道）を通って観音横丁の入口にたどり着く。

元荒川緑道大成町スポット公園そば
大成町７丁目１６２９番地あたり

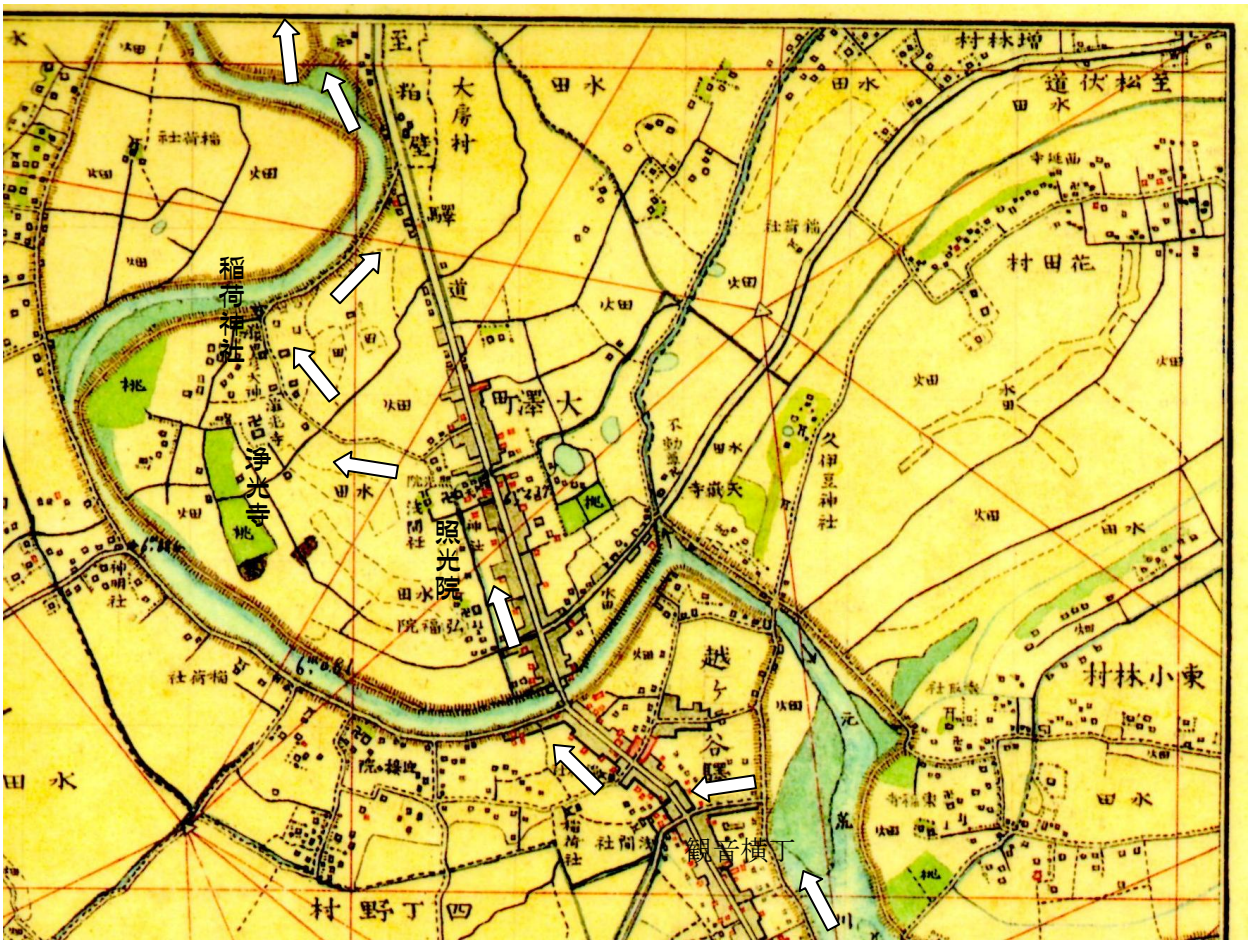
あやの幼稚園の北西にある砂利道
大成町１丁目１１７番地と
５１番地の間

⑥　「中町横町」とは、日光街道（日光道中）に架かっていた中町橋を中心に中町橋の北の日光街道沿いと東の現在の観音横丁〈註６〉を含む地域のことではないであろうか。

観音横町から現在の日光街道へと進み、大沢橋南詰の市神（いちがみ）様（神明社、現在は同じ日光街道沿いの南方に移転）〈註７〉があったあたりで元荒川を船で渡ったと思われる。

さて、次に、元荒川を渡ってから先のルートについて考えてみたい。対岸に渡ってからは、現在の日光街道のように北へ直進すると、大沢で最も低い天神前橋辺りを通過することになり不便な低地を通ることになってしまうので、迂回して、明治１３年測量の迅速図に描かれた元荒川の左岸沿いの堤の土手道（現在の桜の名勝）を通った可能性を考えたこともある。しかし、秦野秀明氏は、同じく迅速図に描かれた浄光寺東側を通って大房村の鎮守稲荷神社（迅速測図では猿田彦祠）の東側に通じる大房道（現在はその名残は全く無い）と呼ばれる古道が往古奥州道と推定している。

大房道について詳しく述べると、大沢の上宿（大沢三丁目）にある日光街道から分かれる小道、つまり天神前橋（現在の「そば水角屋」の南側）を過ぎて百メートル先あたり（現在の「はたの薬局」の南）から西に向かい、かつての自然堤防上（埼玉県県政情報資料室発行「中川水系」によると浄光寺をのせていて、「北越谷河畔砂丘Ｉ」と名付けられている）の道を通る。現在の北越谷駅前郵便局そばの十字路や北越谷公民館付近を通過している。なお、大房道の入り口である「はたの薬局」あたりは、北越谷河畔砂丘Ｉから続く自然堤防上にあるようで、大沢町でも高い所であったため昭和２２年のキャサリン台風でも浸水にあわなかったそうである。



迅速測図「埼玉県武蔵国南埼玉郡越ケ谷駅及大沢町近傍村落」（明治１３年測量）

その古道沿いの大房の浄光寺本堂裏の墓地造成地からは昭和五十年に中世の古銭が出土したという。さらに秦野秀明氏によると「その古道に沿って山伏も点在して住んでいたようで、一次資料より住んでいたことは確実といえ、現在もその子孫の方が当時と同じ場所に住んでおられます。つまり、江戸時代は日光道中から分かれる交通の要所であったのであろう。」とし、この江戸時代の大房道は、日光街道（日光道中）ができる以前の往古奥州道と推定したのである。

押立堤（おったてつつみ）

⑦　「押立堤（おったてつつみ）」とは、北越谷第五公園〈註８〉そばに今もある土手道ではないかと考えた。「押立堤（おったてつつみ）」は、「押江（おおえ）りの薬師」（大房の薬師堂）〈註９〉と関連していると思われる。「押江（おおえ）りの薬師」は、「大江りの薬師」「鵜の森の薬師」とも呼ばれたが、現在は浄光寺に吸収され、この地には宝性院と呼ばれる別の寺院が建っている。かつての「押江（おおえ）りの薬師」の近くの北越谷第五公園そばには、今も残る土手道があるが、押立堤の名残ではないだろうか。そして現在の北越谷第五公園は、かつての元荒川の入り江で、江戸湾の満ち潮がこの地まで北越谷第五公園そば遡上してきたと思われ、その周辺の森には鵜が多く住んでいたのであろう。

「押立堤」は、秦野秀明氏の調査により、かつての大房の薬師堂そばの堤土手であることがはっきりしてきた。秦野氏は、福井猷貞（ゆうてい）著「大沢猫の爪」の中の「上（かみ）外（はず）レ大房村境をさして押立と云」との記載を取り上げて、「上（かみ）」とは大沢町上宿（上組）、現在の大沢３丁目をさし、その「外（はず）レ」の大沢町と大房村との境界を押立と呼ばれていたと解釈し、北越谷５丁目には村組の「押立（おったて）組」がかつてあり、北越谷５丁目の西端にほぼ南北に存在する北越谷第五公園そばの「元荒川」左岸堤防を「押立堤」としている。北越谷第五公園そばにある土手道を「押立堤」と呼ばれたことは間違いがないようである。秦野氏の緻密な調査により裏付けされた大発見といえる。

なお「押立」の読み方は、本来の読み方の「おしたて」が「おったて」となまったものであろう。

次に、日光街道（日光道中）の大松屋（おおまつや）福井家から始まる猿島街道（野田街道）と浄光寺東側を通る大房道や北越谷２丁目あたりの皿沼（さらぬま）道との関係について触れてみる。

「大沢猫の爪」には「元和（げんな）之頃ハ元荒川大堤通（おおづつみとおり）、今云（いう）新田耕地、古名高畑（たかばたけ）皿沼堤上通（つつみうえとおり）、其外（はずれ）、放（はな）れ々住居（ばなれすまい）致居候所、（後略）」と書かれている。「元和之頃」とは１６１５から１６２３年、「元荒川大堤通り」とは現在の猿島街道（野田街道）、そして新田耕地の古名は高畑（現在の東大沢４丁目あたり）である。以上から、日光街道ができる以前は、高畑周辺の元荒川大堤は、皿沼（現在の北越谷１丁目あたり）方面とつながっていたことを示している。どのようにつながっていたかは不明である。前述の秦野秀明氏の指摘においては、北越谷地区では、「大房道」と呼ばれる古道の他に、皿沼にかつてあったとされる「皿沼大堤」が大房道と平行して進み、大房稲荷神社のあたりで大房道に合流していたのかもしれない。これも古奥州道の一部であった可能性は否定できない。

⑧　大里の「古往還」とは、江戸時代の日光街道（日光道中）より古くからあった街道を意味し、大林〈註１０〉や大里あたりでは日光街道より西側の元荒川の古川沿いの自然堤防（河畔砂丘）上を日光街道と平行して進んだと思われる。

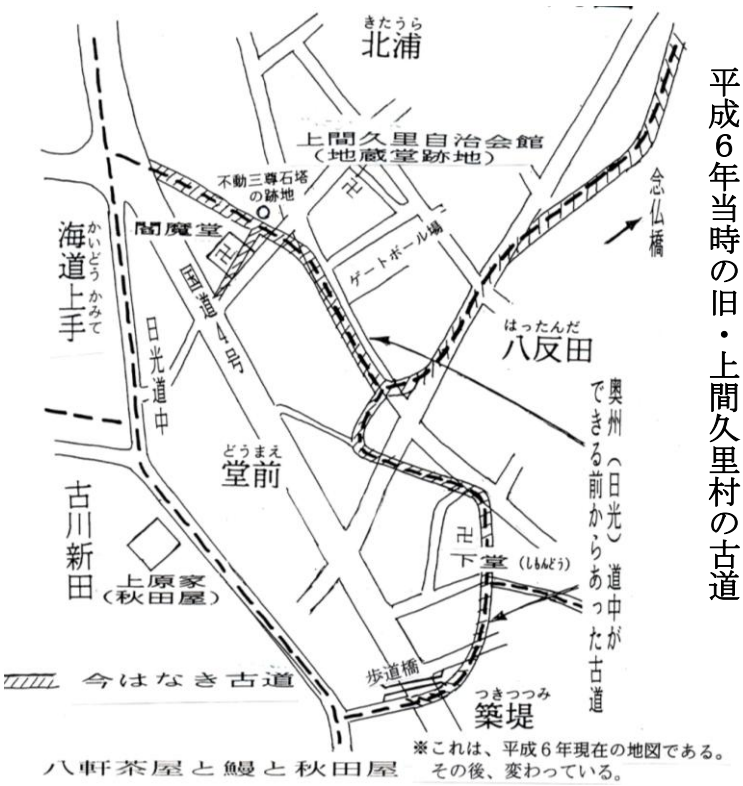
現在の大林自治会館前あたりの道を通り、日光街道（日光道中）と東武鉄道とが交差する大里の踏切あたりで、日光街道に合流したのではないだろうか。

⑨　「間久里」とは、現在の下間久里・上間久里を指し、その古道は、元荒川の古川沿いの自然堤防上に見られる現在も変わらぬ日光街道（日光道中）筋と思われる。

⑨～⑩　間久里から粕壁橋までのルートについては「越ケ谷瓜の蔓」には全く触れていない。

間久里の先は、現在の新方川（せんげん堀）手前の北浦の地となり、かなりの低地となるため、現在の日光街道のように直進して大枝村を通過するとは考えにくく、湿地帯であった低地を避けるため、北東の大泊村方面に迂回したと思われる。

高崎力氏によると、江戸時代以前の古奥州道は、右の平成６年当時の略地図（今では大きく変わった）に描かれているように、堂前の手前から日光街道より東に分かれ、下堂（しもんどう）そばを通るルートであるという。それから念仏橋方面に進んだと推定している。かつての念仏橋通りである。



平成６年当時の旧・上間久里村の古道

略地図中の秋田屋は、高崎力氏によると秋田藩の佐竹公が大名行列の途中で必ず立ち寄って鰻を食した所。この時、日光街道（日光道中）は閉鎖され、旅人は東側の古道を通ったと伝えられている。古道はいわば日光街道の臨時のバイパスとなったのである。

念仏橋方面に進んで、当時は細流だった「せんげん堀」を渡り、道なりに行くと、安国寺の参道に突き当たる。

高崎力氏によると、その先は道がなく、そこで右折し、さらに左に曲がって進み、現在の主要な道路に出るという。その道を横断して平方村方面に通じる道を通って北進する。

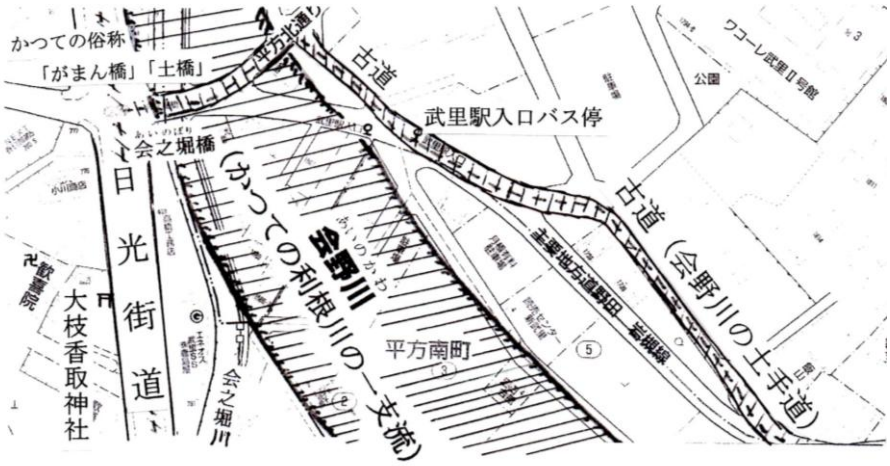
大泊村と平方村の村境には、かつて会野川が東西に流れていた所であり、高崎力氏によると、長い石橋がその川に架かっていて、戦前まで見られていたという。今でも屋号が「石橋」と呼ばれる家が大泊側にある。

（上記の地図は、ゼンリン住宅地図「越谷市」２００６・１２を使用して作成した）

旧・会野川（大泊村と平方村の村境）と石橋

この会野川の名残を渡って進むと現在の「野田岩槻線」の会野川沿いの土手道に突き当たる。今度はこの土手道を西に進み、再び会野川（現在は会之堀川）に架かる上流の会之堀橋を渡って現在の日光街道（日光道中）に合流するのである。

合流した現在の会之堀橋は、地元では「土橋」とか「我慢橋」〈註１１〉と呼んでいた。戦前のこと、武里（たけさと）駅入口交差点の西側の道路南角には、すぐそばの会之堀に架かる土橋からとった「土橋」と呼ばれた屋号の金子氏が、道路北角には「我慢」と呼ばれた正籠氏が住んでいた。正籠氏は職業が人力車、客から運賃を負けるようにせがまれると、ついつい我慢して客のいいなりになってしまうことから「我慢」という屋号がついたという。それ以降、土橋のことを「我慢橋」とも呼ばれるようになった。

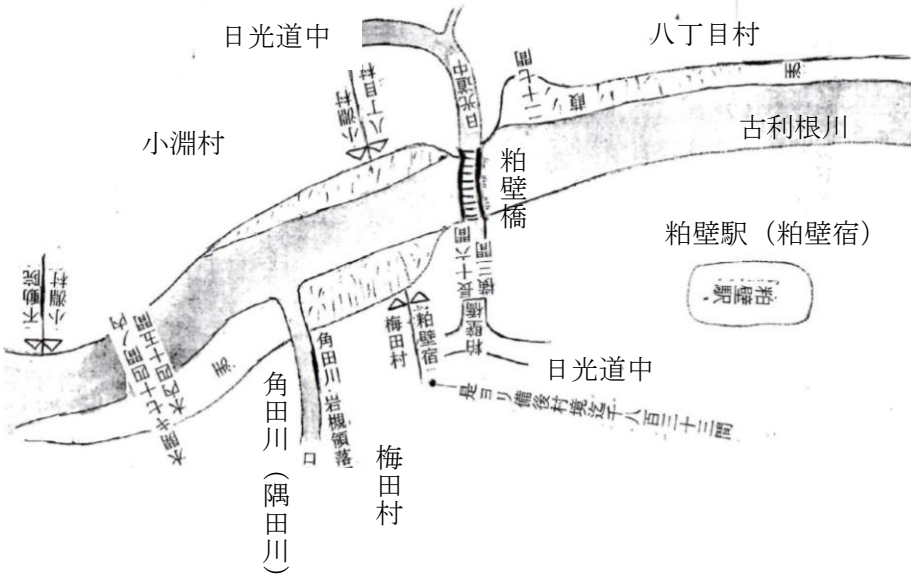


大枝（おおえだ）と平方（ひらかた）を結ぶ
会之堀（あいのぼり）橋周辺

（上記の地図は、ゼンリン住宅地図「越谷市」２００６・１２を使用して作成した）

春日部市に入ってからの古奥州道は、現在の藤塚橋の北から備後村の周りを西に反時計回りにかつて流れて「会野川」（平方村の南側の周りを流れる当時の川で、今はその名残はない）に合流した川（現在の会之堀川の一部）があり、この川を仮に「備後西川」と名付けると、備後西川の左岸の備後村にあるよく発達した自然堤防（河畔砂丘）上の道を進んだと推定した。

つまり、会之堀橋（旧称・土橋、がまん橋）から日光街道（日光道中）を北に進み、備後南交差点の東側に左折した道に入る。地元では「高道（たかみち）」と呼ばれ、武里小学校の東側の道に通じる高い古道で、備後の西側にかつて流れていた備後西川の土手道といえる。次には、地元では「街道」とかつて呼ばれた大池（おおいけ）通りを進み、「粕壁橋」方面に向かう。粕壁橋とは、下の古絵図の解読により現在の古利根川に架かる「新町橋」であるとわかる。



粕壁橋（現、新町橋）

越谷市立図書館所蔵
絵図の部　資料番号２５
「八条領村々絵図」（解読作成・加藤）

⑩　「粕壁橋」とは、越谷市立図書館蔵の古絵図「古利根川流域絵図」によって現在の古利根川に架かる新町橋のこととわかったが、粕壁橋そばの古利根川を渡らずに、粕壁橋手前を通って、西にある自然堤防と河畔砂丘が発達している浜川戸そばの古隅田川を渡ったものと推定する。その場所は梅田橋あたりではないだろうか。梅田橋は、古く江戸時代から古隅田川に架けられた橋であるからである。

なお、古隅田川の御厩瀬渡は、太田荘花積郷（おおたのしょうはなつみごう）にあるとされることから、「越ケ谷瓜の蔓」に言う奥州道とは関係なく、元荒川左岸の大道村（越谷市大道）を抜ける別ルートの中世の奥州古道の一部ではないだろうか。御厩瀬渡については、遠藤忠氏著の小論文「旧利根川の御厩領関について」に詳しい。古隅田川の右岸（北岸）にあった「御厩領関」の「領」は、「料」（料所つまり関銭を取る料金所）のことで、陸上関（渡し）より水運としての水路関（河関）としてとらえて論じ、旧利根川の河関を紹介し、御厩瀬渡は、「みまやせのわたし」ではなく、「みまやのせわたし」と読むべきだとしている。

⑪　「百間[を]通り、幸手[に]入る」とは、古隅田川を渡ってからは、現・宮代町の百間を通り、当時の利根川（現、古利根川）にあった高野（たかの、現・杉戸町）の渡しを渡り、かつての鎌倉街道であった日光御成道（鎌倉街道の中ツ道・中の道）まで進み、そこから御成道、さらに御成道に合流する日光街道（日光道中）を進み、江戸時代の幸手宿に至ったのではないであろうか。さらにその先にある日光街道から筑波道に分かれる追分（幸手市外国府間６２６）で、筑波方面に進み、現在の権現堂川に、かつてあった「栗橋の渡し」（元栗橋、現・五霞町）を渡って奥州（東北地方）方面へと進んだのであろう。粕壁宿以降のルートについてはこのように想像してみた。

⑫「御成道迄川付き堤（を）通り、往還にて之れ有る由。」とは、百間から日光御成道までは川付き堤を通り、御成道に合流してからはかつての鎌倉街道であった街道筋（日光御成道や日光道中）へと進むということであろう。「川付き堤」とは、秦野秀明氏によると、かつての利根川本流である高野川（現・古利根川）左岸沿いの堤上の道と推定できるとのことである。また高野の渡しは、下（しも）高野にある「万願寺橋」辺りと比定されているとのことである。

日光街道と筑波道との追分（幸手市外国府間）

向かって左の道が日光街道、日光街道から分かれる右の道は筑波道。
中央の石塔は、「右つくば道、左日光道」と刻まれた道しるべ。

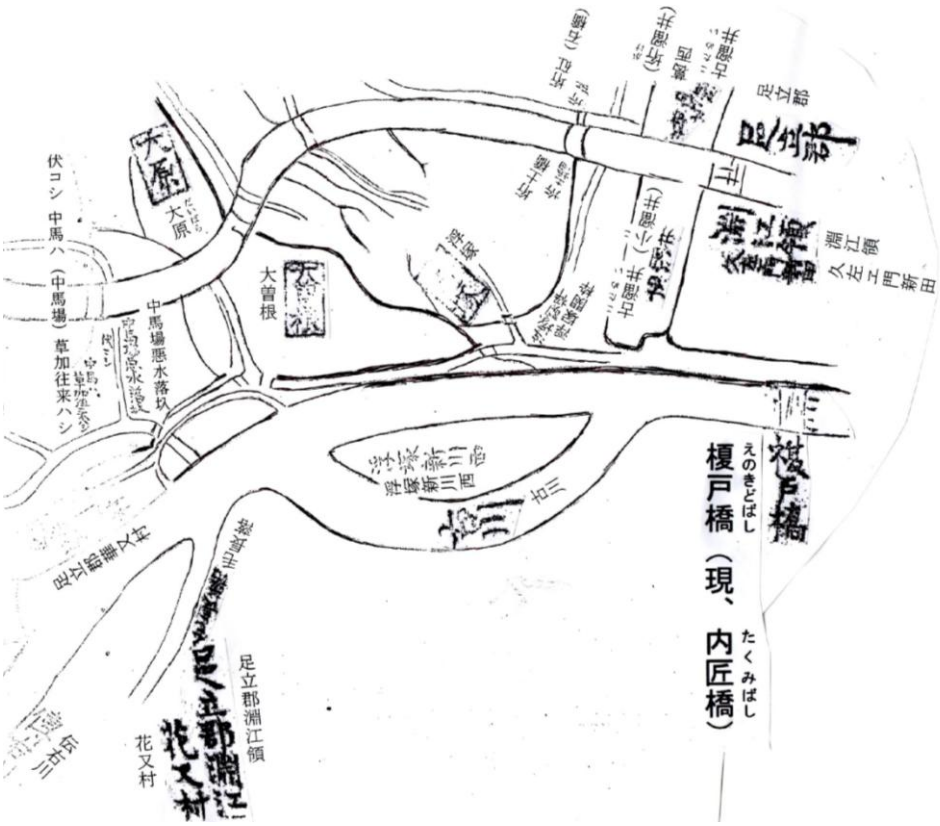
３．補説〈註１〉～〈註１１〉について

〈註１〉奥州道（鎌倉街道支線）

「ブックレット足立風土記①千住地区」（足立区教育委員会）の７２頁「足立区の交通誌マップ」の中に示された「推定鎌倉街道支線」（奥州道）を参照した。

〈註２〉榎戸橋（現、内匠橋）

越谷市立図書館蔵・絵図の部・資料番号２８「古利根川流域絵図」（解読作成・加藤）



現在、「榎戸」と呼ばれている地域は、南花畑三の二一の一の塩田接骨院や花畑小学校あたりから、浮花橋の先の南花畑四の八の八までの地域を指す。古綾瀬川遊歩道より北側（埼玉県）は含まない。

〈註３〉大原道

大原小学校のそばを通る八潮市内の南北の道。戦後になっても、道の両側にハンの木の並木が見られていたという（高崎力氏談）。

松や杉などの並木は、街道筋にはよくみられるものである。

〈註４〉八条の渡し

戦後、河岸の船着場の護岸を守るためにか、多くの竹が川に面して地面に直角に並べられて敷かれていた跡があるのに気付いたという（高崎力氏談）。

〈註５〉南百の地名のいわれ

高崎力氏によると、戦後まで地元の古老の間で受け継がれてきた言い伝えがある。

南百村の宝性院（現在の南百農村センター）の南西隣（東町２－１３３）に広大な敷地が残っていて、遠い昔に（江戸時代初期か）ここに「お屋敷」があった所で、そこには楠と栢（柏）の大木がそびえたっていたという。船頭の目印になったのであろう二つの大木の名前から木へんをとって南百村の村名が生まれたという。この敷地には、屋敷があるにふさわしく固い地面をし、さらに素焼きの破片等が散乱していたので、かつては人が住んでいた気配を感じたとのことである。

なお、南百は、現在「なんど」と呼ばれているが、それに関して髙橋操氏は次のように紹介した。「寛永十年の『武蔵国図』記載の南百は岡山大学蔵では【なんどふ】とありますが、秋田県立公文書館蔵の『武蔵国図』では、【なんとば】とあり、漢字で『難渡場』『南渡場』と表記できそうです。」

〈註６〉観音横町

観音横丁土手側入口の道しるべ

土手道の観音横町入口の角（セブンイレブンの道路反対側、越ケ谷５－３－５６）までが江戸時代は現在の観音堂の境内地であった。この角に東向きに道しるべがあった（右図・作成者加藤）。この道しるべの西の方面は日光街道（日光道中）を横断して赤山道に入る。また南の方面は大相模の不動尊や遠くは成田山に、北方面は野田や宝珠花に通じるのである。現在この道標は越谷市中町の箕輪家で保管されている。

セブンイレブンの南側は、かつては「六本木（ろっぽんぎ）」と呼ばれた場所で、江戸時代の仕置き場（処刑場）であった所という。ここには高札場があったに違いない。

日光街道（日光道中）にあった中町の中町橋の東側が今の観音横町であるが、「中町横町」とはこの観音横町と中橋の北の日光街道沿いを含む地域であったのであろう。

「越ケ谷瓜の蔓」に『二七市日ハ本町・中町ハ一並日也、元本道なれ共日光道筋ニ相成申候儘横町と唱、』と記載されている。つまり、「二七の市の日は本町と中町とも一致した日である。[元荒川に沿った南百からの土手道から観音横町に続く]元の[奥州道の]本道であるが、日光街道筋になってからも横町と呼ばれる。」というような意味であろうことからも中町横丁は中橋の北側も含むことがわかる。

〈註７〉市神・神明社

越ケ谷宿の二七の六斎市は、「新編武蔵風土記稿」によると、江戸時代以前（文禄年間）、つまり越ケ谷宿が成立する以前から行なわれていたと言う。現在の大沢橋南詰めの御殿町（会田出羽家屋敷地、後の江戸幕府の御茶屋御殿）よりに市神を祀る神明社があり、元荒川の水運を利用して市が栄えたのであろう。江戸時代以前の越ケ谷郷の六斎市といえよう。

なお越ケ谷郷とは、現在の越ケ谷町（越ケ谷郷から名づけられた）及びその広大な周辺を越ケ谷郷と呼んでいた。岩槻領鈎上村の江戸時代初期、慶長年間の検地帳に「武州騎西郡越ケ谷の内、鈎上」との記載が見られることから、現在の岩槻区鈎上あたりまで含まれ、小田原北条氏が永禄５年（１５６２）に葛西領の金町の本田氏にあてた書状には「越谷・舎人」は大郷と記載されていることから、広大な地域であったことがわかる。

越ケ谷郷の中心は、元荒川の自然堤防上の四丁野村（現在の宮本町）だったかもしれない。越ケ谷町の市神様（神明様）は、四丁野村より勧請したもので、四丁野村は、そういう意味で越ケ谷町の元郷といえる。また、さらに古く、「千葉氏大系図」に出てくる中世の野与党の一族、古志賀谷（越ケ谷）氏も、後の江戸時代になって四丁野村と呼ばれるようになるこの地に居を構えて、越ケ谷郷を支配していたのではないかと思う。

〈註８〉北越谷第五公園グランド

かつての大房の薬師堂は、「大江りの薬師」とか「押江りの薬師」とも書き、「押江り」とは「押し入り江」がなまったものであろうか。

この北越谷第五公園グランドは、かつて元荒川の入り江であったと思われる。

〈註９〉大房の薬師堂

「大江り（押江り）の薬師」、「尾入りの薬師」、「鵜の森の薬師」とか地元で呼ばれてきた大房の薬師堂が昭和の頃まであったようである。現在は宝性寺越谷別院が建っている。

大房の薬師堂

〈上は大房薬師堂の五智如来堂〉
「越谷ふるさと散歩」（越谷市）より

高崎力氏によると、薬師堂内には、近郷の村々からやってきた人々による俳句が書かれた額が飾ってあったので、遠くの村々からやってきた人々が集まり、俳句の会が盛んに催されていたようである。そしてここには、高崎力氏の測定によると、共に樹齢が五百年のケヤキ（本堂向かって左）とイチョウ（本堂向かって右）の大木がそびえていた。船頭の目印になっていたのであろう。

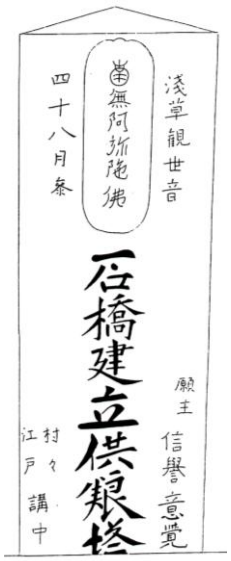
一説に、この二つの大木は、松尾芭蕉が訪れた時に植えた木ではないか、それゆえ、この地では俳句が盛んになったのではないかと思われていたという。

元荒川は、江戸湾の満ち潮がこの地まで遡上してきたと思われる（現在は瓦曽根の水門で満ち潮が止まっている）。そのため、江戸時代は、薬師堂の周辺の森の木々には鵜が多く止まっていたと思われ、「鵜の森の薬師」とも呼ばれた理由が納得する。そして、入り江では、元荒川を利用している船のための停泊地として利用されていたと思われる。現在の北越谷第五公園グランドの地である。

〈註１０〉大林（おおばやし）の香取神社の西側

大林の香取神社の西側あたりから古川までの河畔砂丘上には、赤松も見られる「大林の桃山（ももやま）」が一面に広がっていたという。

また、袋山（ふくろやま）の周囲を迂回して流れていた古川（旧・元荒川）沿いの自然堤防沿いの道は、現在の大里８４０番地から大里７１５番地にかけての北東に進む古道及びその先の下間久里（しもまくり）や上間久里（かみ）の日光街道（日光道中）をさすと推定できる。



高崎力氏によると、古川の東岸（左岸）は、河畔砂丘が広がり、古川（大林と袋山との境）から亀が大林側の砂丘に上がってきて、古川左岸あたりは亀の生息地になって、子供たちがそれを捕まえて業者に売ったり、越ケ谷の久伊豆神社の池に放したりしたという。久伊豆神社に今でも住む亀はこの古川で捕獲された亀と思われる。

〈註１１〉土橋（「我慢橋」）そばの江戸時代の石塔

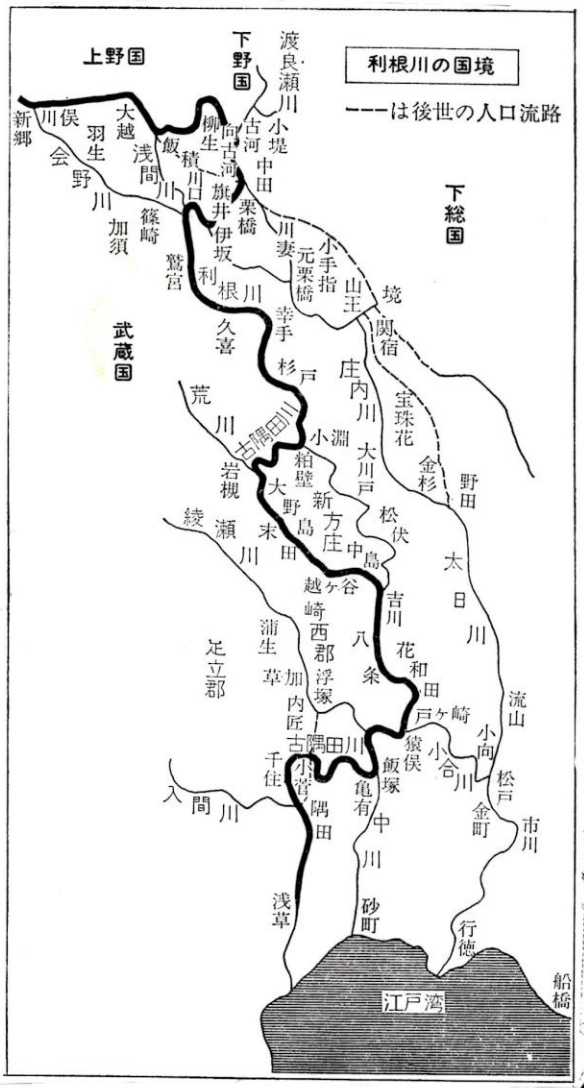
右の石塔は、会之堀橋（あいのぼり）の平方（ひらかた）側近くにある石橋供養塔である。日光街道（日光道中）から平方に入る地点に橋が架けられていた。ここに新たに石橋が建立されたことを記念し、供養の意味も込めてこれを建てたのである。この石塔に刻まれた銘文によると、造立した一人である「願主・信誉意覚」は、「浅草観音」「四十八月参」と刻まれていることから、浅草観音に毎月参拝し、それを三年間も続けたことがわかる。この石塔は、「江戸」や近在の「村々」で作った「講中」の人々によって建てられたものである。江戸との人的交流がうかがえる。

この供養塔には言い伝えが残っている。江戸時代のこと、この川に架かっていた橋がもろいため荷馬車が馬もろとも川に落ちてしまった。馬は死んでしまった。そこでその馬を連れて来た江戸浅草の人が土橋を頑丈な石橋に直した。その記念にこの石塔が建てられたという。

平成２４年７月２４日

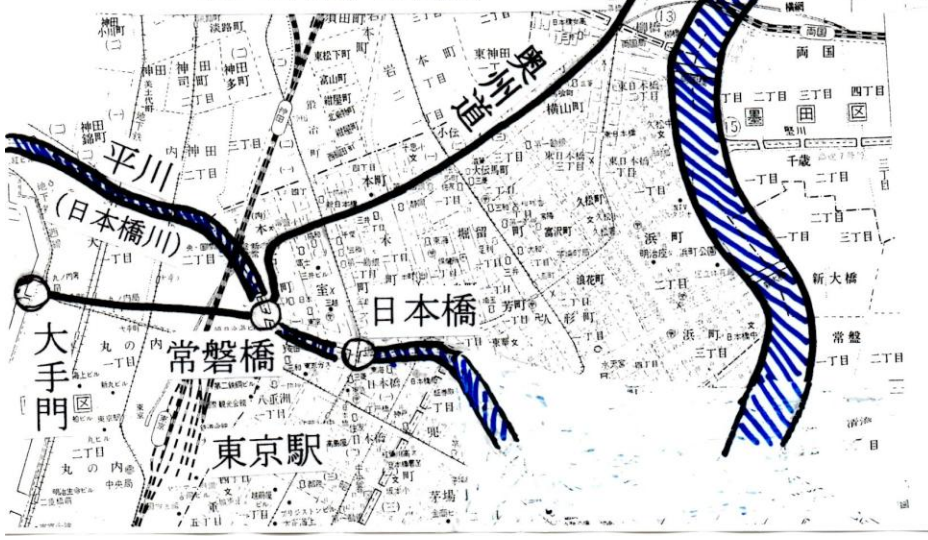
No．1

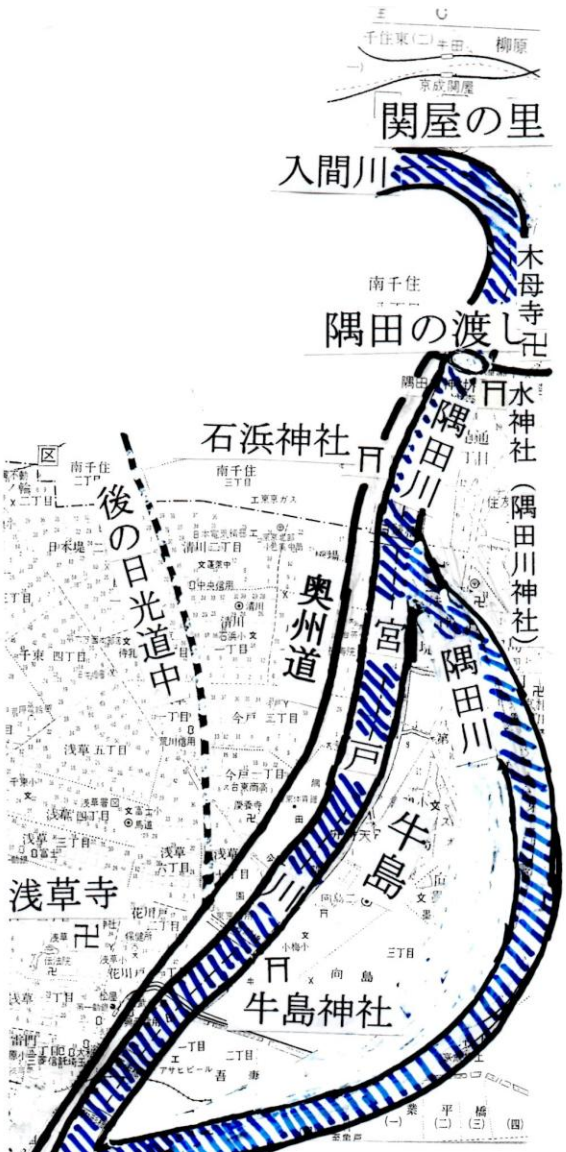
古代の隅田川（利根川）



上図は、本間清利氏の「利根川」（埼玉新聞社）より抜粋

かつての隅田川（上流では利根川）は、古利根川（春日部市）から古隅田川（春日部市）、元荒川（越谷市）、中川、古隅田川（足立区）、隅田川と下総国と武蔵国の国境を流れていた。

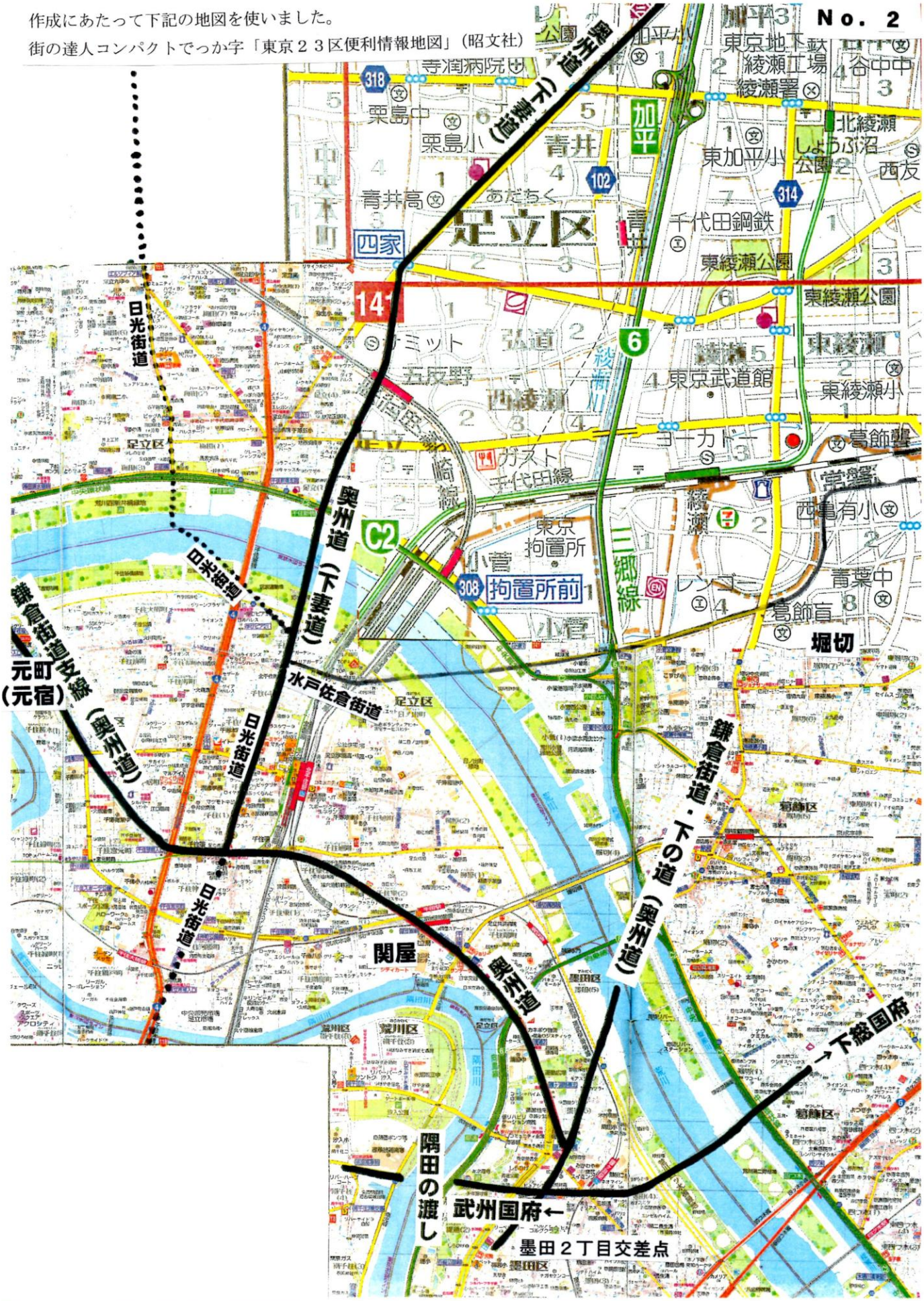




作成にあたっては
昭和５０年９月発行の
「ミリオンデラックス
東京都区分道路地図帳」
（東京地図出版）を利用しました。

作成にあたって下記の地図を使いました。

街の達人コンパクトでっか字「東京２３区便利情報地図」（昭文社）



※地図中の奥州道は、正確な道筋ではありません。自動車利用の時のルートです。
作成にあたって下記の地図を使いました。
街の達人コンパクトでっか字「東京２３区便利情報地図」（昭文社）

※地図中の奥州道は、正確な道筋ではありません。自動車利用の時のルートです。

作成にあたって下記の地図を使いました。

街の達人コンパクトでっか字

「東京２３区便利情報地図」（昭文社）

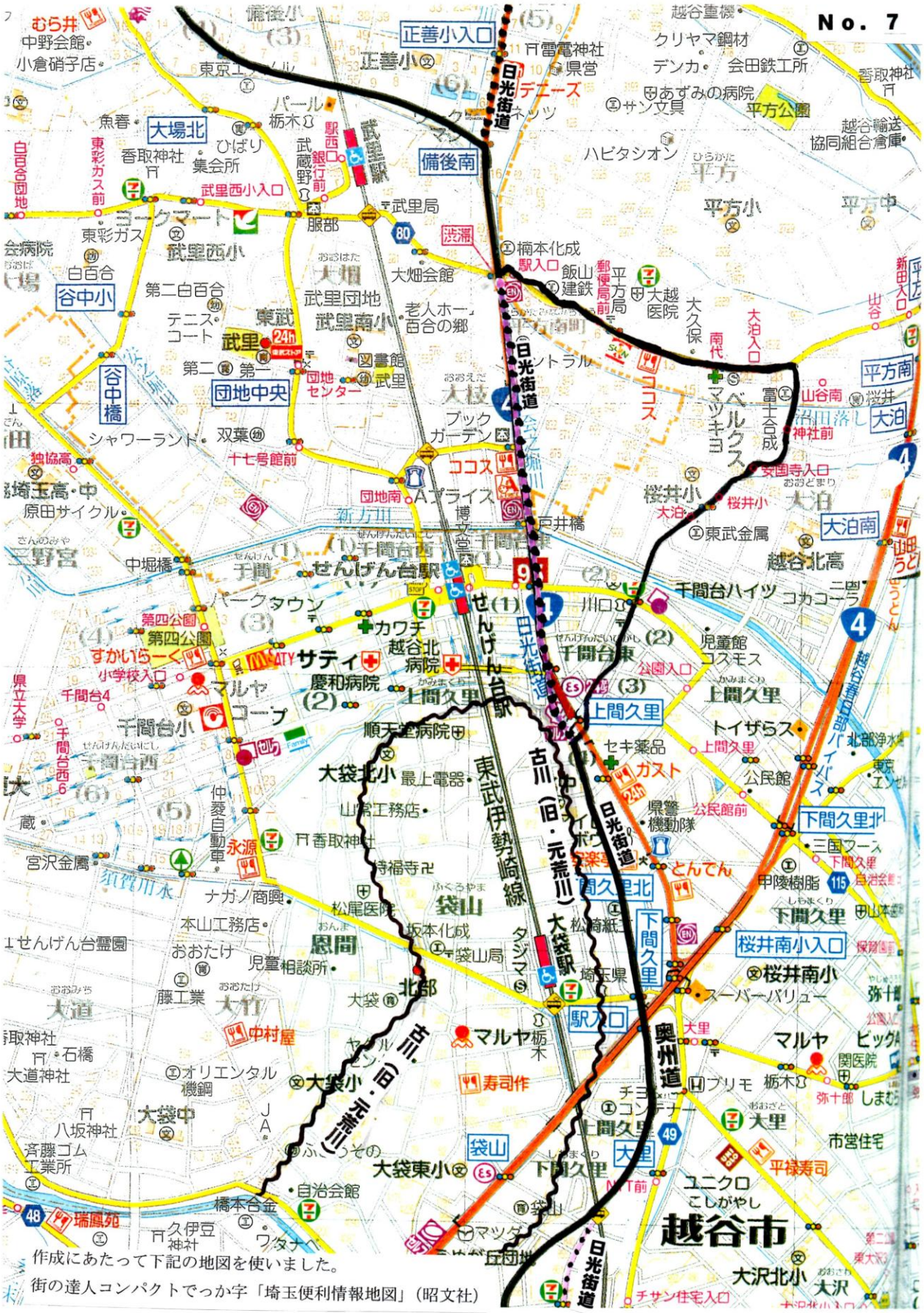
作成にあたって下記の地図を使いました。

街の達人コンパクトでっか字「東京２３区便利情報地図」（昭文社）

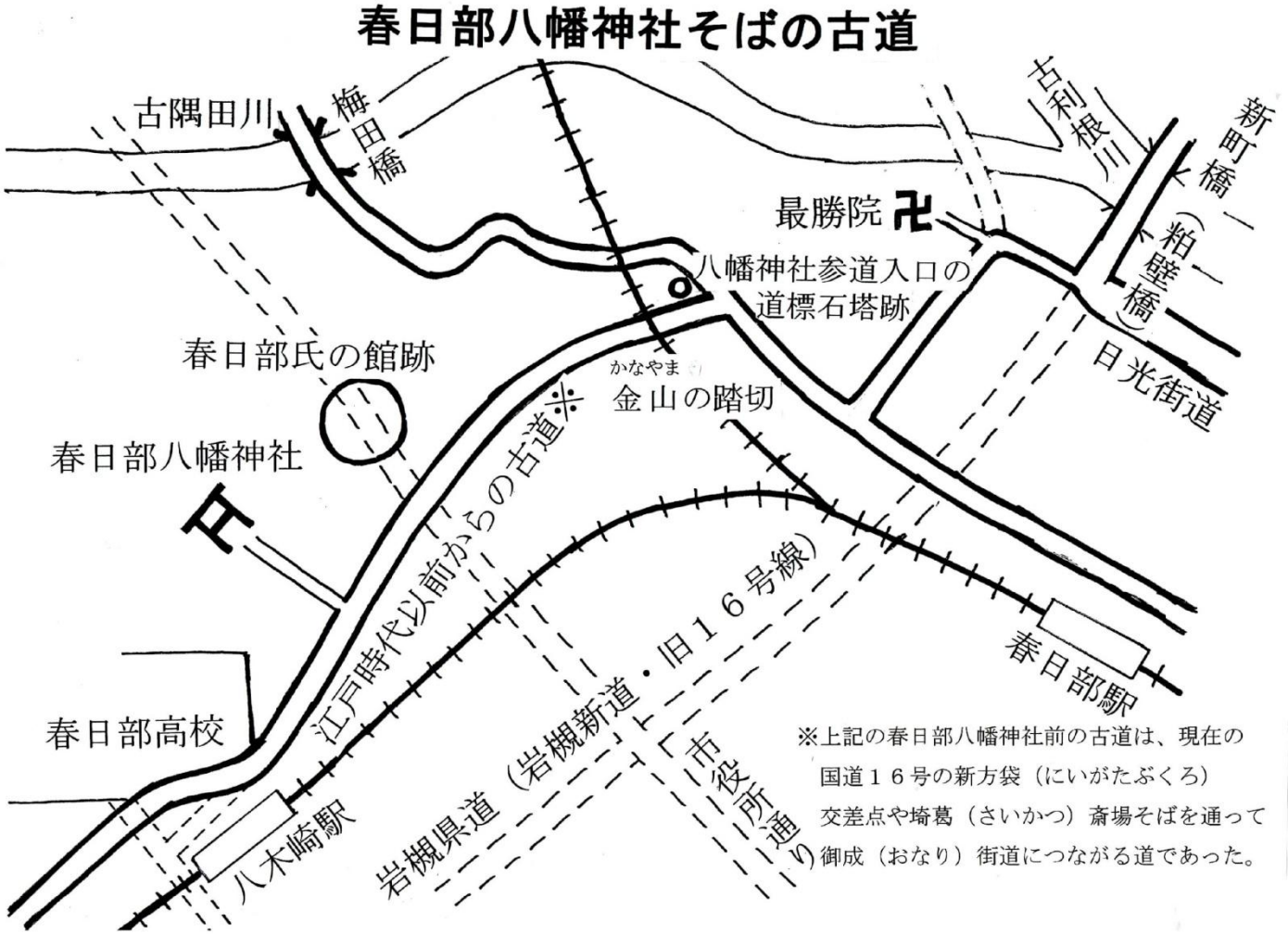
No. 6

作成にあたって下記の地図を使いました。

街の達人コンパクトでっか字「埼玉便利情報地図」（昭文社）


No. 7
正善小入口
日光街道
備後南
武里駅
大場北
谷中小
谷中橋
団地中央
武里西小入口
武里西小
武里団地
武里南小
東武
武里
渋滞
大畑会館
老人ホーム百合の郷
図書館武里
団地センター
十七号館前
シャワーランド
ブックガーデン
ココス
Aプライス
戸井橋
せんげん台駅
千間台東
千間台西
千間台ハイツ
パークタウン
第四公園
カワチ
サティ
越谷北病院
慶和病院
上間久里
マルヤ
コープ
千間台小
順天堂病院
大袋北小
東武伊勢崎線
古川（旧・元荒川）
大袋駅
袋山
恩間
北部
大袋
マルヤ
寿司作
大袋小
大袋中
大袋東小
下間久里
駅入口
奥州道
大里
越谷市
桜井南小入口
桜井南小
下間久里北
下間久里
とんでん
ガスト
セキ薬品
トイザらス
公民館
県警機動隊
公民館前
三国マース
甲陵樹脂
スーパーバリュー
ユニクロ
平方公園
平方小
平方中
平方南
大泊
大泊南
桜井小
越谷北高
東武金属
富士合成
ベルクス
マツキヨ
ハビタシオン
デンカ
会田鉄工所
クリヤマ鋼材
越谷重機
あずみの病院
サン文具
デニーズ
ネッツ
県営
雷電神社
飯山建鉄
大越医院
大久保
南代
大泊入口
山谷南
桜井
沼田落し
神社前
安国寺入口
越谷輸送協同組合倉庫
香取神社
魚春
ひばり集会所
香取神社
東彩ガス前
東彩ガス
白百合団地
白百合
第二白百合
テニスコート
第二
第一
中野会館
小倉硝子店
東京工
パール
栃木
武蔵野銀行前
駅西口
武里局
服部
ココス
ナガノ商興
本山工務店
せんげん台霊園
おおたけ
児童相談所
藤工業
中村屋
オリエンタル機鋼
八坂神社
斉藤ゴム工業所
瑞鳳苑
橋本合金
久伊豆神社
ワタナベ
自治会館
袋山局
坂本化成
松尾医院
松崎紙工
埼玉県
タジマ
市営住宅
平禄寿司
関医院
栃木
プリモ
チサン住宅入口
大沢北小
大沢
作成にあたって下記の地図を使いました。
街の達人コンパクトでっか字「埼玉便利情報地図」（昭文社）

No. 8
現・梅田橋
あたり
粕壁橋（現・新町橋）
日光街道
中央1西
浜川戸
新方袋
南中曽根
駅入口
八木崎駅
春日部高
粕壁
春日部駅
春日部市役所
市立病院
市農協
谷原2
立沼橋
粕壁東3
一宮
緑町4
上沼小
防災センター
春日部署
大沼5
谷原中
武里小
大場北
奥州道
東武伊勢崎線
松栄学園高
税務署
豊町
谷原
大沼
一ノ割
武里中
春日部共栄高・中
谷原新田
下大増新田
上大増新田
大増中
春日部湯元温泉
春日部高技専・ハローワーク
介護保健施設ちとせ
興和精機
共栄学園前
春日部車庫
温泉入口
秀和綜合病院
清水クリニック
山崎材木店
しまむら
千秋
須賀稲荷神社
戸田建設
備後西
備後小
むら井
中野会館
小倉硝子店
東工務店
日本セロンパック
慈愛園
武里商会
新見世原商店
スリーエム
武里中野
谷原親水公園
中野中
魚春
ひばり
東京工
パール
栃木
ガスト
どらごんラーメン
元気寿司
ひかり第二
厚生病院
セイムス
藤塚
マルエツ
春日部内科
円福寺
ノ割駅
ノ割局
市民センター
第四
谷竜
ユニクロ
ゆりの木医院
ガーデン
地方庁舎
松栄学園高
大沼3
野球場
第六記念館前
中央8
中央5
八木崎小
八木崎記念館
青山
TSUTAYA
マルヤ
安楽亭
島忠
西八木崎
地方合同庁舎
リンガーハット
ドイト
豊町局
春日部勝彩園
大沼記念館前
大沼公園
大沼運動公園
体育館
馬車道
大沼中入口
大沼6
下日整骨院
公園前
上沼小前
フードガーデン
市民武道館
秀知病院
春日部署
立野小
共栄高グラウンド
春日部高
高校入口
浜川戸局
丸和油脂
明治乳業
すしおんど
デニーズ
ヨーカドー
タイキボール
埼玉りそな
武蔵野
コピンソン
Robinson's
須原屋
群馬
関東つくば
図書館
市民文化会館
女子高入口
コモディイイダ
賢住寺
郵政
春日部女子
日産部品
ヤナギ管材
アオキ
緑町局
マツダ
カローラ
労基署
三愛
粕壁小
馬車道
市役所前
市役所裏
市立病院前
内谷記念館前
藍屋
三崎港
谷原2
中央5
中央8
大沼3
大沼5
大沼6
大沼中
大増中
谷原新田
谷原中
武里中
武里小
備後西
備後小
東武伊勢崎線
奥州道
大場北
大戸
野島大谷
下大増新田
上大増新田
春日部湯元温泉
安之堀川
長ノ堀川
中之堀川
利根川
水神社
谷原親水公園
イングハット
里みどり住宅
薄谷
武里中野
武里中野原中
しまむら
フラワーヒル・一ノ割
一ノ割公園
山崎材木店
清水クリニック
綜合病院
秀和綜合病院
共栄学園前
春日部車庫
温泉入口
温泉
春日部高技専・ハローワーク
介護保健施設ちとせ
興和精機
春日部湯元温泉
共栄学園前
春日部共栄高・中
谷原新田
下大増新田
上大増新田
大増中
大沼記念館前
大沼公園
大沼運動公園
体育館
馬車道
大沼中入口
大沼6
下日整骨院
公園前
上沼小前
フードガーデン
市民武道館
秀知病院
春日部署
立野小
共栄高グラウンド
春日部勝彩園
大沼
大沼5
大沼中
清水クリニック
山崎材木店
しまむら
一ノ割
奥州道
東武伊勢崎線
千秋
須賀稲荷神社
戸田建設
備後西
備後小
むら井
中野会館
小倉硝子店
東京工
パール
栃木
魚春
ひばり
大場北
武里小
武里中
武里中野
武里中野原中
谷原中
谷原親水公園
中野中
東工務店
日本セロンパック
慈愛園
武里商会
新見世原商店
スリーエム
戸田建設
備後西
備後小
千秋
須賀稲荷神社
円福寺
ノ割駅
ノ割局
市民センター
第四
谷竜
厚生病院
セイムス
藤塚
マルエツ
春日部内科
ひかり第二
元気寿司
立沼橋
どらごんラーメン
ガスト
緑町局
マツダ
カローラ
労基署
三愛
粕壁小
馬車道
市役所前
市役所裏
市立病院前
内谷記念館前
藍屋
三崎港
谷原2
中央5
中央8
大沼3
大沼5
大沼6
大沼中
大増中
谷原新田
谷原中
武里中
武里小
備後西



※上記の春日部八幡神社前の古道は、現在の国道 16 号の新方袋（にいがたぶくろ）交差点や埼葛（さいかつ）斎場そばを通って、御成（おなり）街道につながる道であったという。

※この江戸時代以前からあったといわれる古道は、埼葛斎場の手前で古隅田川を渡るが、ここが太田荘花積郷（はなつみごう）にあるとされる御厩瀬渡（みまやせのわたし、みまやのせわたし）ではなかろうか。下流の長宮方面の古隅田川左岸（東側）自然堤防上（金山堤）からやってくる古道の渡し場でもあろう。

※上の地図で、現在の春日部駅そばから梅田橋方面に続く古道が江戸時代以前の草加市内の中川沿いや越谷市内の元荒川沿いからやってくる古奥州道と推定できる。

※「金山」の読み方は現在は「かなやま」ですが、本来は「かねやま」と呼ばれたという。

※八幡神社参道入口の道標石塔が金山の地にあるのは、江戸時代、ここが交通の要所だったからと思われる。

※かつてこの近くの現在の春日部中学校の校庭あたりに金山稲荷（三囲稲荷）があって、信仰が盛んであった。現在は、大正年間に粕壁４－２－２２と４－２－２５の間に移転して現在に至っている。

平成２４年９月４日